

背景は「玉川峡写真集」狩野桂一



平成三十年四月一日（日）から六月二十四日（日）まで
登録有形文化財「藤岡家住宅」NPO法人うちのの館（やかた）
月曜休館・月曜が祝日のときは開館して翌日休館・9時～16時
高校生以上300円・小・中学生200円・20名様以上2割引

「空海と二匹の犬」展

宇智野の里に残る空海の物語

今昔。弘法大師。大和の国宇智郡うちのこおりに至りて一人の獵りの人に会す大小二の黒き犬と具せり「今昔物語」

ホームページ「うちのの館（やかた）」
で検索して下さい



空海と二匹の犬

～宇智野の里に残る空海の物語～

平成 30 年 4 月 1 日（日）から 6 月 24 日（日）

登録有形文化財「藤岡家住宅」 管理人・NPO 法人うちの館（やかた）

〒637-0016 奈良県五條市近内町 526

電話と FAX0747 (22) 4013 info@uchinono-yakata.com

<http://www.uchinono-yakata.com>

月曜休館・月曜が祝日のときは翌日休館・9 時～16 時

高校生以上 300 円・小中学生 200 円・20 名様以上 2 割引



写真①②道標



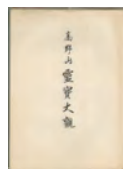
写真③高野導き犬
和歌山県郷土玩具

登録有形文化財「藤岡家住宅」は、金剛山麓にある庄屋屋敷であり、初代藤岡長兵衛（延享 4 年・1747 年～文化 9 年・1812 年）は、大和新四国 88 箇所を五條市内に設定し、御詠歌を版木で刷って人々に配りました。藤岡家の前には文化 3 年（1806 年）に初代藤岡長兵衛が建てた道標（写真①）があり、そこには「左金剛山／右五條 高野」と刻まれています。高野詣の後、中辺路に出て熊野詣をする旅人のために、文化 15 年（1818 年）に 2 代藤岡長兵衛が山中に建てた道標（写真②）には「右龍神 大水のときはこちらへまわるべし」と、大水で道が崩れたときの旅人への指示が刻まれています。五條市には、弘法大師伝説も多く、平安時代後期の「今昔物語」には、空海を高野へ案内した二匹の犬と宇智野（五條市）で出会ったという説話が残ります。高野・吉野・熊野・葛城～金剛山という山々に囲まれた五條の土地には、山岳信仰として修験道と仏教が並立して存在しました。「空海」という偉大な存在は、その民衆文化の一つの象徴であったとも言えるでしょう。文政 7 年（1824 年）の「龍神行きの覚え」（写真⑤）ほか、「高野山靈宝大観」（写真⑥）「高野山国宝帳」（写真⑦）など明治～昭和の貴重な書物。多数の祈祷札（写真⑧）など金剛山麓の一地域に残る「民衆の祈り」の文化遺産を展示します。



④「手鑑」より伝空海筆の経切
「小般若波羅蜜多經 卷九」

⑤「龍神行きの覚え」



⑥「高野山靈宝大観」昭和 35 年金剛峯寺発行表紙の文字は「豊誓指帰」から集めた空海の本筆



⑦「高野山国宝帳」3 冊。明治 41 年 金剛峯寺発行



弘法大師行状曼荼羅より空海と二匹の犬



⑧祈祷札など

空海と二匹の犬について

「弘法大師始建高野山語（こうぼうだいしはじめてこうやのやまをたてること）「今昔物語」卷第十一第二十五

今は昔、弘法大師、真言教諸々（もろもろ）の所に弘め置き給いて、年漸く老に臨み給う程に、数（あまた）の弟子に、皆、所々の寺々を譲り給て後、「我が唐（とう）にして擲（な）げし所の三鈷（さんこ）落ちたらむ所を尋む」と思ひて、弘仁七年と云う年の六月に王城（みやこ）を出て尋ぬるに、大和国、宇智の郡（こおり）に至りて一人の獵（かり）の者に会いぬ。其の形、面赤くして長（たけ）八尺計（ばかり）也、青き色の小袖を着（ちやく）せり。骨高く筋太し。弓箭（きゅうせん）を以て身に帯（たい）せり、大小二の黒き犬を具せり。即ち、此人（このひと）、大師を見て、過ぎ通るに云く「何ぞの聖人（しょうにん）の行（ある）き給うぞ」と。大師の宣（のたま）わく、「我れ、唐にして三鈷（さんこ）を投げて、「禅定（ぜんじょう）の靈穴（れいけつ）に落ちよ」と誓いき。今、其の所を求め行く也」と。獵（かり）の者（ひと）の云く「我は是、南山の犬飼也。我れ、其の所を知れり、速に教え奉るべし」と云いて、犬を放て走らしむ間、犬失せぬ。大師、其（そこ）より紀伊国の堺、大河の辺（ほとり）に宿（やどり）しぬ。此（ここ）に一人の山人（やまびと）に会（あい）ぬ。大師、此の事を問給うに、「此より南に平原の沢有り。是（これ）其の所也」。参考資料「日本古典文学体系 今昔物語」（昭和 38 年 岩波書店刊）（古写本は片仮名宣命体）

（現代語訳）今は昔、弘法大師は、真言の教えを諸所に広め置かれたが、しだいに老齢になられたので、多くの弟子たちに、あちこちの寺をお譲りになった。その後、「私が唐にいる時投げた三鈷の落ちた場所を捜そう」と思って、弘仁七年（816 年）（空海 43 歳）という年の 6 月に、都を出て捜し求めるうちに、大和国宇智郡まで来たところで一人の獵師にあった。その姿は、顔は赤く、身の丈は 8 尺ばかり（およそ 242 cm）ある。青い色の小袖を着ていて、筋骨逞しい。身に弓矢を帯び、大小 2 匹の黒い犬を連れている。この人は、大師を見て、通り過ぎて行く時に、「何と申される聖人が行こうとされているのでしょうか」と言った。「私は唐にいる時に三鈷を投げ、『禅定の靈穴に落ちよ』と誓願しました。今、その所を捜し求めているのです」と答えた。獵師は、「私は南山の犬飼獵師です。私はその場所を知っています。早速教えましょう」と言って、犬を放って走らせると、犬は見えなくなった。大師は、そこから紀伊国の国境にある大きな川（吉野川）のほとりまで来て宿泊した。そこで一人の山人（山で暮らす人のことか）に会った。大師が三鈷の落ちた場所のことを尋ねると、「ここから南の方に、平原の沢（平らな湿原）があります。そこがお尋ねの所です」と答えた。